

現職教育推進計画

相馬市立玉野中学校

I 研究主題

活用力を高める学習指導の工夫

～ 必然性のある課題設定と思考過程の共有化を通して ～

II 主題設定の理由

◇ 生徒の実態から

- 少人数学級のため、落ち着いた態度で授業に参加している。
- 自分の考えを積極的に発表できる生徒はいるが、お互いに意見を交わし合うことや、様々な考え方にふれて自分の思考を深めていく場面が少ない。
- 考えや意見を伝える場を与えれば自己表現できる生徒が多いが、わかりやすく説明できる生徒は少なく、授業などで日常的に表現する機会を与える必要がある。
- 他と自分を比較する機会が少なく、自己の変化や成長を感じられる機会が少ない。

◇ 昨年度の実践の成果と課題、全国学力・学習状況調査の結果から

- 授業において、思考・判断・表現の場を意図的に位置づけたことで、発表したり、自分の言葉で説明したりすることに抵抗なく取り組むようになった。
- 教師の適切なコーディネートにより自己表現する場面は増えたが、生徒同士での話し合いでは自分の考えを上手に説明することができない生徒も見られる。
- 全体的に学力は向上している。教科によって学力差が大きく、苦手意識が強い教科は、基礎的・基本的な内容の定着が不十分な生徒がいる。
- 基礎的・基本的な学習内容が定着している生徒が多いが、知識や技能を活用する力をさらに育成する必要があり、教師の支援の仕方に工夫が必要である。
- 家庭学習の取組は個人差が大きい。そこで家庭学習の充実のため、学習内容の質と量を工夫させることや家庭との協力が課題となっている。

III 研究仮説

1 研究仮説

学習指導において、以下のような手立てを講じれば、

- (1) 主体的に学習に取り組む態度を養うとともに、(2) 基礎的・基本的な知識・技能の確実
(3) な定着と、思考力・判断力・表現力等を育成し、活用力が育まれるであろう。

【具体的手立て】

手立て1 (4) 必然性のある課題設定をする。

手立て2 (5) 思考過程の共有化を図る。

2 仮説にかかわる概念規定

(1) 「主体的に取り組む態度」とは

主体的とは、「自分の意志・判断によって行動するさま」とされている。これを生徒の学ぶ姿に当てはめると自ら探究的に学び続けようとする姿である。それは、進んで課題を見つけることに始まり、その問題を解決するために必要な情報を収集する方法を考え、集めた情報を判断し、取捨選択できる生徒である。さらにどのように考えをまとめ、どのように表現すればよいかを考え、他者にわかりやすく伝えることのできる生徒である。

(2) 「基礎的・基本的な知識・技能」とは

学習指導要領の指導事項(内容)に示されているものを対象にした基礎的・基本的な知識・技能である。生活や学習の基盤となるものであり、日常生活においても各教科や総合的な学習の時間における学習においても、様々な活動の基になるものである。

(3) 「思考力・判断力・表現力」とは

基礎的・基本的な内容が定着され、習得された知識・技能を活用して課題を解決するために必要な能力ととらえる。これらの能力は観察・実験レポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を充実すること、さらに総合的な学習の時間を中心として行われる、教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動の質的な充実を図ることで育成される。

※「活用力」とは、問題を解決する際に必要な能力である思考力・判断力・表現力と捉える。

(4) 「必然性のある課題設定」とは

「～について読み取ろう」「～について考えよう」「～について調べよう」という課題は何を考えればよいのが明確ではなく、教師の一方的な提示となりがちである。生徒が考える必然性をもち、学習意欲を高めるためには、「問い」を引き出すことが必要である。その「問い」を引き出すには、「教材や資料の提示の仕方」や「活動の設定の仕方」を工夫し、「問い」を学習課題につなげることが大切である。しかし、日々の授業において、必ずしも毎時間、生徒から「問い」を引き出し、課題につなげることができるとは限らず、教師が課題を提示することも考えられる。そのような場合においても、発問を工夫することで、学習の主体者である生徒に課題を意識させるようにすることが重要である。



(5) 「思考過程の共有化」とは

生徒の思考を深めたり、表現を豊かにしたりするためには、思考過程を共有することが必要である。思考過程を共有するための手立てとして、「予想活動」「補助活動」がある。「予想活動」とは、友だちの考えやその続きを考える活動である。「～さんの考えの続きが言えるかな」「～さんは何をしようとしているのかな」などと発問し、どのような考えをしたのか予想させたり、途中まで説明させてその続きを予想させたりすることである。また、「補助活動」とは、発表者にすべてを発表させずに、その考えにつながるヒントを出させながら考えていく活動である。発表者だけでなく、その考えを共有した生徒にもヒントを出させることで、みんなで考えるという意識を高めながら思考過程を共有することができる。教師が思考過程の共有化を意識しながら授業を展開することで、共に考え、伝え合う楽しさを感じさせることができる。



IV 研究の実際

1 全校学力調査の結果を踏まえた重点的な取り組みについて

【国語】

- 「話すこと・聞くこと」について、ただ意見交換をするだけの話し合い活動ではなく、互いの発言について検討したり、別の立場や視点から考えたりするような活動を取り入れる。
- 「読むこと」について、課題解決の際に、学校図書館やコンピュータやインターネット等を利用して、情報を収集し、整理する学習活動を継続していく。
- 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」について、基礎知識を定着させるため、継続的な漢字テストや文法事項の指導、また辞書の活用等、日々の授業の中に取り入れる。

【数学】

- 単元テストや定着確認シートを活用し、生徒の実態を把握し、定着度の低い内容については、学び直しの時間を設定したり、個別指導を行ったりして、基礎基本の確実な定着に努める。
- 筋道を立てて説明する問題の正答率が低い結果だったので、授業の中で判断した理由を数学的な表現を用いて説明する場を設定する。
- 活用力の育成のため、計画的に問題解決的学習を行う。

2 校内授業研究の実施

- ① 美術 平成28年 9月 9日（金） 初任者へき地校研修
- ② 理科 平成28年10月31日（月） 授業学研究所による授業実践講座
- ③ 社会 平成28年10月31日（月） 授業学研究所による授業実践講座
- ④ 国語 平成28年12月 2日（金）
- ⑤ 数学 平成28年12月14日（水）

3 授業を支える活動や基礎基本を定着させる取組

(1) 家庭学習を充実させる指導・PU（パワーアップタイム）

本校は山間部にあり、学習塾や家庭教師などを利用することは難しい環境にある。そのため、生徒の実態に合わせて問題集（5教科の教科書ワーク）を活用し、家庭学習の充実を図ってきた。その内容は、生徒に1日1教科の問題集を持ち帰らせ、授業で学習した内容までの問題を解かせる。そして、次の日の朝自習の時間（PU）に解答を配付し、自己採点させ、できなかった問題の復習を行わせるというものである。また、生徒にわからない問題があった場合、すぐ教師に質問できるよう、視聴覚室に全校生が集合し、全職員で支援を行った。さらに昨年度からは、学年毎に異なる教科を学習するよう計画し、教科担当教員が中心となって、より個に応じた支援を行えるよう改善した。

昨年度からの課題は、問題集の取り組み方に個人差があることだった。「学習の量」については、例年通り、1、2年生は問題集の他に自主学習ノートを1日2ページ、3年生は受験対策教材を使った学習を行うことは変えずに、問題集は1日2ページ以上とし、全校生で「学習の量」を競い合えるようグラフの掲示を行った。問題集のやったページの数だけ、グラフにシールが貼られるのである。毎月、最も学習量の多い生徒は「キングオブPU」として賞賛されるようにした。学年内での競争では、順位が固定化されていると考える生徒が多いため、全校生で競うことは、生徒の意欲を高めた。検定試験や定期テスト前は、問題集を使った学習を行わないので、授業で学習した内容まで問題集を進めることができない生徒がいたが、長期休業中に学習会を行って問題集を進めさせたり、定期テスト前は、テスト勉強に問題集を使わせたりするなどの対策を行い、少しずつ改善が見られるようになった。

「学習の質」については、わからない問題があっても質問しなかったり、わからないまま解

答を写して終わってしまったりする生徒はいるが、教科担当教員を中心とした、全職員によるきめ細かな個別指導により、昨年度より改善が見られたと考える。

学習面で個人差の課題はあったが、朝の時間を落ち着いた雰囲気での学習に取り組むことができ、1校時目の授業の滑り出しもよくなった。PUの後の短学活も全校一斉に行うことで、生徒指導の話や連絡事項なども徹底することができた。この取り組みは、各学年が少人数である本校の場合、学習面以外でも大変効果的であった。

(2) 各種検定の実施

全校生が「玉野中検定部」と称し、各種検定試験（漢字検定、数学検定、英語検定）を受験した。

この取り組みは、今年度で5年目になるので、2・3年生は昨年度取得した資格からさらにレベルアップした級を選択し、教科担当教員による検定試験に向けての学習指導や、DSソフトを活用しながら学習を進めることができた。検定試験の2週間前は、放課後30分間、1週間前はPUの時間を検定試験に向けての学習時間として、指導を行った。

それぞれの検定に向け、「合格」という明確な目標をもって学習に取り組む姿が見られ、学習意欲の喚起につながる有効な取り組みであった。

(3) 玉野地区における小・中連携の取組

本校は、小学校がすぐ近くにあるため、合同で取り組む行事が多く、また、今年度は小学校の教員が保健体育の指導をしている。小中の教職員で日常的に共通理解を図りながら教育活動に取り組むことができた。

現職教育では、それぞれのテーマで研究を進め、互いに授業を参観し、研究を深めた。事前に指導案を配付し、授業を参観することで、小中での学習内容の系統性や指導方法を共有することができた。小学校でどのような学びをしてきたのかを知ることができ、中学校での学習指導に役立てることができた。特に今年度は、小学校主催の教員を対象とした講習会に中学校の教員も参加したり、小学校の経験者研修Ⅱの教員が中学校の授業を参観したりするなど交流が多く、小中連携による研究が充実していた。



(4) 連携型中・高一貫教育（相馬東高校）の実施

数学科と英語科において年間10回程度、高校の教員が中学校に来校し、中学校教員と一緒に1・3年生の授業を行った。相馬東高校の先生方には、基礎学力が向上するよう、本校生徒の実態に合わせたきめ細かな指導をしていただいた。また、相馬東高校主催で、1・2年生を対象とした進路セミナーも行われ、高校の先生方から進路選択する上でのポイントを指導していただいた。現役高校生2名からも、高校生活の様子や高校卒業後の進路について、生の声を聞かせてもらい、生徒にとって、大変参考になる内容だった。受験に向けて意識の向上を図るよい機会となった。

(5) 定着確認シートの活用

定着確認シートで、学習内容の定着状況を把握し、それに応じた授業の改善を行った。しかし、実施する時間を確保することが難しく、定期的な実施ができなかった教科もあった。週末課題等で利用するなど、活用するための工夫が必要だった。

(6) 外部講師による提供授業

「対話を通して、2つの数量の変化と対応について
生徒が主体的に追究し、そのきまりを探る授業過程を展開したい」

福島大学教授 森本 明 先生

全学年一斉の数学の提供授業を、福島大学の森本先生に実践していただいた。

「何回で同じ枚数になるかな？」という題材で、ある約束にしたがって青と赤の2つの箱に1回、2回…とそれぞれカードを入れていくとき、何回で2つの箱のカードの枚数が同じ

になるかを考える授業を実践していただいた。本時は、2つの数量の変化と対応について主体的に追究する活動を、ともに根拠を明らかにして説明することを通して、納得したり説得したりしながら物事を探るという観点から取り上げた授業であった。

1年生から3年生までの全校生徒が、意欲的に取り組める課題を設定していただき、生徒の発見や考えをうまく引き出し、発表しやすい雰囲気の中で、意欲的に課題解決に取り組む姿が見られた。

数学科以外の教員も含めた全職員で授業を参観し、研究協議会では、活発に意見交換を行うことができた。本校の現職のテーマにもとづいた、授業をつくるポイント、少人数教育を充実させるために大切なことなど詳しくお話いただき、充実した研究協議となった。



(7) 経験者研修 I の実施

年間を通して経験者研修 I が行われ、本校教員 2 名が、校長・教頭による講義、担当教科・道徳・学級活動の授業研究のほか、福島大学附属中学校の公開授業の参観や分科会への参加、教育センターでの宿泊研修を行った。教員としての心構えを新たにし、研修で学んだことをこれからの教育活動に生かしていく。道徳や学級活動の授業研究では、少人数学級における課題を解決するべく、指導の工夫を盛り込み、生徒が来年度から大きな集団の中で生活していくことを見越した内容で行った。

(8) 長期休業中の学習会の実施



夏季と冬季の長期休業中の平日は、1・2年生は部活動前の1時間、3年生は3時間、PUで使用している問題集を進めたり、実力テストの過去問題を解いたりする場を設定し、「学習会」として実施した。長期休業中であっても、学習習慣を継続させることができた。

また、河合塾ネクストの講師 2 名をお招きし、夏季は2日間、冬季は1日間、数学と英語の講習会を行った。生徒は、いつもと違う授業に少し緊張しているようだったが、仙台の受験生の学習状況などの情報もいただき、よい刺激となった。

V 成果と課題

1 日々の授業と校内研究授業から

本校は、全校生徒 10 名（1 学年 3 名、2 学年 1 名、3 学年 6 名）の小規模校である。昨年度は、「活用力を高める学習指導の工夫」を現職教育のテーマに掲げ、「知的好奇心の喚起」「思考・判断・表現の場の充実」を手立てとし、研究を行った。「知的好奇心の喚起」については、「やってみたい」「どうしてそうなるの」という生徒の学びに対する主体的な姿が見られたが、さらに「活用力」を高めるためには問題解決的な学習過程を組む必要があるという課題が生まれた。「思考・判断・表現の場の充実」については、意図的な表現の場の設定により、生徒は自分の言葉で説明することに抵抗なく取り組めるようになったが、様々な考え方にふれて自分の思考を深めていく場面が少なく、知識や技能を活用する力については、まだ課題が見られた。

そこで今年度は、現職教育のテーマは継続し、昨年度得られた成果と課題から、さらに「活用力」が高められるよう、「必然性のある課題設定」と「思考過程の共有化」を手立てとし、研究を行った。



(1) 手立て1「必然性のある課題設定」について

生徒の興味・関心や学力の実態に合わせた課題が設定され、授業の導入においては、生徒にとって身近な事象から疑問をもたせたり、生徒のもっている概念を壊すような事象を提示したりすることで、生徒の中に「問い」が生まれるよう工夫することができていた。また、生徒が課題を捉えやすくなるよう、図や実演で視覚的にわかりやすくする工夫も多く見られた。

必然性のある課題設定と教師の適切なコーディネートにより、生徒が粘り強く課題解決に取り組む姿が見られた。

教科によっては、その特性により、日常的に必然性のある課題設定はできなかった。そのような場合であっても、生徒の主体的な学びや活用力の向上につながるような発問を工夫していく必要がある。

活用する意欲を高めるには、課題をより生徒の生活に近づけ、学ぶ意義に気づかせることも必要である。

(2) 手立て2「思考過程の共有化」について

発表や話し合いの場を設定することで、生徒が自分の考えを相手に分かりやすく伝える努力をしたり、友達の考えに耳を傾け、それをもとに自分の考えを深めたりする姿が見られた。ペアやグループなど、課題や生徒の実態に合わせた形態で言語活動を行うことで、生徒が課題解決に向けて協働し、思考を共有する姿が見られた。授業の展開の中で、思考を深めるための補助教材やICT機器を効果的に活用できていた。

「予想活動」や「補助活動」を積極的に取り入れて実践することができなかった。生徒同士の意見をつながられるような、話し合いの支援技術が必要である。

2年生の1人の授業においては、教師が他の生徒の役になったり、同年代の意見を紹介したりする方法が考えられるが、日常的に行うことは難しい。

少人数のため、個に応じた支援ができるが、活用力や主体性の育成のためには、教師の支援の仕方に工夫が必要である。

2 授業を支える活動や基礎基本を定着させる取組について (教師アンケートより)

- 各学年、生徒たちは自分の学習スタイルを構築しながら自主的に学習を進める態度が向上してきた。
- 英語検定試験では、英検週間の活用により、効果的な学習をすることができ、10名中9名が合格することができた。
- PUは、問題集をやってきたページ数を確認することで、昨年度より意欲的に取り組む生徒が増えた。
- 各種検定の実施は、国語・数学・英語にとっては、良かったのだと思う。
- 家庭学習を習慣づけることができた。
- 自主学習の内容について、生徒の実態に合わせて支援・指導することができた。

- 周りからの学習への刺激や競争心を高めるためには、学習集団の規模が必要であるが、キャリア教育と並行しながら目的意識を確認し、自主的学習への取り組みを向上させなければならない。
- 家庭学習の質を向上させることが、今後の課題である。
- 定着確認シートを定期的実施することができなかった。昨年度より授業時数が不足しており、授業で扱うことは難しかった。週末課題等で利用すべきであった。
- 生徒の発達段階にもよるが、もっと「自発的な学習」を意識した取り組みが、今後必要なのではないか。
- 検定試験の内容の定着が不十分に感じる。
- 社会科に関しては、どんな問題集でも何度も繰り返し解かないと知識が定着しないと思うが、生徒はPUの問題集を一回解いただけで、二度と見ることもない。そのため、社会科の力が上がらないようだ。
- 定着確認シートをもっと活用できるよう工夫していく必要がある。